玉文傳
續いろは文庫
第壹輯
579
東京圖書館
和書門
小說類
函
別三架
五九號
三冊

特40
579

序

は文序

義士傳い復讐の後より間なく家の風
を結局とする所趣向の多く
孫の家駁を十八年より始め
書い度ふ事ど書き遺を拾ひ諸士の家傳
永く家の業と防れ
弘法者がゝのみを書ひ十九年
二十いまだ成ざるまで仮清みないこと其の

稽古記に見えたる色も香も今の新茶樹の姫君と読ばれんの数まさしぬ都よりもまさる黒牡丹世に稀なる角のいろはまた度々古い好きの唐家の百花園の雲と惜み高国が旬のあらかねども多く栽てが有なるは傳。

良雄の書一覧草山丹の函梅植なのまま南やどり竜か力はたらきて

塙氏。沙弥上人が厨貴仲とあらはせいかゝ。一重八重咲まさる世間とかゝるゝ

葉ひてのらすすん年年

時の作家のつまく牡丹もの

長崎の記南の意はまもり志はた

二世

柳亭種彦

國と要ひて家と忘れ身を捨るの士寡くらべと雖も。

其拔ぬきさへ。切を積で

其拔と雖ども。義を重んじて法に死す。近世義死の人とゝ雖ども。故に百世の後に至るまで。美名の残るを嘉賞せらる。

明治元年十月吾妻くも

紹して

權令の羅宗の獄君を

弟岳に死しめ良雄が墓

に全都を畑ひ。い者に元祿

十四年より百六十七年ぬ。此の

御國と家を思ひ。忠義を盡せし。

田城しみる竹の細枝行日影
菊屋
水戸
新春
若菜
松葉
梅の
宝船

柳亭種彦編次

○第一回

よしなしや深き心を嘸とだに知られて消ん嶺の白雪。とハ雪に寄る戀に題したる。爲家卿が歌よして。爰に兩國横山町の商人。富多屋の悴瀧次郎ハ。骨董の鑒定家服部宗伴が娘お糸を戀そめて。想ひハ積る雪の夜に。八文字屋が著述の。茶人堅氣に有さうな。騒からして緣談の。瞬間に整ひて。吉辰を選び婚禮し。封閉醫師の寸白夫婦と。番頭忠助等には皆それ〳〵の褒美を授け。夫婦の中

も睦まゝあれば。兩親ハいふ迄もなく。家門の繁榮之に如ぎと。日毎に客ゝ寄集ひ。祝ひの酒宴のこゝてありしが。霰交の寒風よ今夜ばかりハ客もおければ瀧次郎ハ部屋の炬燵よ。足踏のばゝて其角が點の。附合ゝ巻を操返ゝ見てゐるが

瀧「夜が長い〳〵と思ふうちよ。今打た柏子木ハ最う亥刻だ。お糸も寐るがよからうぜ

糸「ハイ御床も敷せて置ました

瀧「そんなら直よ臥る事とさう。やう。と厠へ行て手を洗ひながら。空を詠めて立戻り

瀧「此寒風でハ急度雪よ成るだらうヨ。其雪で思ひ出しゝが。十月初旬の雪の茶の湯よ。招待ゝが縁と成て。願ひの通り斯う夫婦よハなられゝが。該夜の寒さといふものハ。今よ忘れられゝいと。寸白をんが毎度話すが。彼夜の事を今思へハ。實よ夢のやうで可笑ゝ騒きさのハ寔よ奇妙ゝ神業だといひますが。其御縁よ付てハ實よ困る事が。ト云ふけて。金平戸の十六盤珠の付ゝ銀簪で。前髪の所を掻ゝがゝ俯向くてゐてハ解らゝいから話ゝて聞せるよ

糸「イエ

何まる次夜の事より致しませう（流「オヤ訝しい事をいふじやアないか。夫婦の縁を結んだよ付て。困るとハ氣より障らぬ。噫、解つゝ此家へ嫁より來る前より。内〳〵私通しゝ情郎でもあつて。彼是むづかしい。一件でもあるのかへ（糸「アレまア澤山そんな事を仰しやいまし。吾儕より於てハそんな水性な事ハ。芥子粒ほども有ハ致しませんものを。何を證據より時〳〵お嬶なさるのでせうト。少し涙ぐむで怨めしさうに顔を見る（流「是さ。何も然う腹を立てとハなからうじやアないか。情夫が無れば無いで善が。其困るといふ話しの跡を聞せないから氣より成ハ（糸「然うお疑んなさるから。間が惡いなれども申ませうか（流「色氣のない話しなら何でも遠慮なしいふが善のさ（糸「是ハ實家の親父より頼まれゝ一件でございますよ（流「フム池の端のお父さんが。おまへより何を頼だのだエ（糸「斯な事を申はすと。實より慾張てゐるやうで可咲しうございますがね。此方で御出入の本所の高野様でハ。御茶がお好で。大そう貴い道具を召から。如何かして御出入に成て贏さいものだ

が。古い御出入の他は御門内へ立入る事の出來ない。嚴しいお屋敷だが。今度斯う富多屋さんと御親類に成たうへは。隱さないでも御存知の通り。舊ハ鹽谷の家來でハあるし。一通りでハ迚も御出入も出來ないが。如何か旨い手續きを求めて。高野樣へ賣物をする工夫ハあるまいか。首尾があつたらお聞申て見て吳ろと。先日里がへりに參つた時に吳ぐも親父が賴みましたのでございまして。何を言ハ憎がつてゐるのかと思つた。然いふ商法筋の周旋かへ。夫ハ嘸迷惑であつたらう。併しお父さんも先達ての類燒から。今度ハ婚禮何やらやで。出費を大方でハなからふから。一贏たらいで仲たやるのを御尤至極だが。高野樣の御門の嚴しいのハ實ハ野暮過るよ。夫でいふもト低言ハ成て。鹽谷家の浪人衆が種〻身を扮して。讐だで狙擊ふるも知れないでふ御用心ださうだが。池ハ端のお父さん抔ハ。去年殿中の騒動の數年前ハ。道具の鑒定の一件で。不首尾ハあつて御屋敷を退なすつたのださうだから。何も今更身扮して入こむ抔でいふ。野

暮な了簡もあるはいし。却て疑ふ所ハ微塵もないのだるに。内の慈父さんゐを何やら相談して見やうが。今差當つて。何か賣込たいやいふ品でをあるかヨ。糸「ハイ取込で居ましゝから吾儕もまだ見ましなんだが。此頃大坂ハ豪商の所から出るを同業うちハ者が持て下りましゝ高金な茶入があるさうでどざりまして。濁「フウ然いふ傳來の品なら嘸結構な名物であらうが。銘ハ何といふヨ。糸「ハイ笹啼といふさうでどざりまして。濁「成ほど冬ハ茶の湯遣ひまハ面白い名だが。一夜明てハ可咲しくないから早く賣込たいといふも。商賣ハ其道ふだなト。感心ながら少し考へ。濁「お屋敷の御隠居師直様ハ。近ふ上杉家へ御引移になるを付て。本所のお屋敷の名殘に。一會催しゝいを仰しやるに付て。何か是ハと御客の目を驚かす程の品があるなら。知らせて呉ろと。商賣違ひの品ながら。近頃已も茶をするといふ所から。御側の鷺坂様からお話しも有るが。客嗇家ハ様て極贅澤な御隠居様だから。迚も並一通りハ物ハ納まらないが。如何か工風し

殺生の闘争
忠義を
全うす
滝次郎

お京

て其茶入を。御覽よ入るを潮よ私の妻の親父で
どざりますと。明白よ申上て。以後御出入を願ふ
やうよし度ものだ。糸「然う成ますと實よ結構で。
實父も大僥倖でどざいます。と莞爾笑ふ容貌ハ。
未だ聲の發ぬ笹、帝の茶入の名さへ忍ばれて。い
とたらーさの彌增ければ。お糸の顔を覗き込て
流「黄鳥よりも可愛らーいのを糸「アレ忌でどざ
いますよ。此とき戸外を通る夜商人が「おてん燗
酒ヱ熱い〳〵

○第二回

瀧次郎ハ只顧におお糸を愛ず心より。父が前を取
繕ひ。帥直が側去ぢの鷺阪伴内よ。賄賂多く贈け
れば。左よも右よも屋敷へハ入難ゐれど。宗伴で
やらに面會せんといふ事にて。西兩國の代地
なる河長といふ料理屋ハ二階迄來りゐれば。其
日の馳走ハ悉く富多屋の賄ひよて。柳橋で撰抜
の藝妓。お琴小石お文お筆などを聘き盃も一順
巡りゐれば。酌の者を一同に席を立せて聲を低
め「偖宗伴老ぬさいの義ハ瀧次郎がら承知ー
ゐ。此度上方よりゐつゐ笹、帝の茶入を御覽に

入るを縁として。自今屋敷へ立入ば。舊が盧谷の家來ゆゑ當時在府の者ゝ甲乙。まゝ舊領の播州赤穗や大坂邊に潜むである。故同寮の擧動を一〻よ吾輩まで。知らせもしより。或時ハ御直よも申上るやうよし度との願ひハ。此方よりても望むところゆゑ。如何よか御前を執成て自今出入を致すやう。必ずとも取計らふ〻龍次郎も安心さつーやゝ「貴君様が然う力を入て下されば。何でも出來ぬ事ハござりませんが。是が他人の御取持ならお疑ひも御座りませうが。愚妻の

實父でござりますから必とも御心置なく「宗」唯今聟が申上ます通り御出入ますへ相成ます れば。舊同藩の事かどハ聞込次第よ根を探つて一〻申上ませうら。其義よ付まして宜敷く御執成を下さりますれば。貞よ有がたい事でござります「伴」何ハ兎もなれ。肝心の茶入を先見度もの だが「宗」いや其仰がござりませんとても。是非御一覽を願ひますと。古更紗の帛を纏て二重函よ入る陶器の茶入を見せて。まゝ小さる桐の函よ入り祐乘の作の獅子の色繪の目貫よ熨斗を

附て宗「是ハ甚だ麁末な品でハどざりますが初めて御目通りを願ひまして印までよ差上度ござりますが御召料より成ますれば有がさふ存じますと聞より伴内ハ眼を細くし伴「イヤ先日も龍次郎を以て好物の品〻を過分よ贈られさのみおらぢ。重ね〳〵の心配ハ無用にすればよかつさに。と茶入や目貫を熟と見て伴「何れも是ハ又とおゐ結構の品あれば。御前を首尾よく執成て。御買上に成さ所で折〻お茶の御相手にも出られるやうにしてやらう。サア此用向が濟だうへハ藝妓等を皆二階へ呼入て苦〻くるい。宗伴も今日ハ過してたんと飲がよいぜ宗「へヱ有がさふどざりまそ。といふ間に手を鳴して瀧「オイ〳〵皆なが最う出て來ていゝよ色話しハ濟だから琴「オヤ然ですか嘸持た事でせうねヱお浦山し石「それでも驚阪さんハ浮氣で入つしやるかよ。何が出來ても直に倦ておいまひ成るでハ有ませんゝ伴「イヤ〳〵吾輩に於てハそんな浮氣杯といふ事ハ一切ない。此節ハ旦那のお相手かさ〳〵茶の湯一三味の樂みさ文「虚ばりりお吐なさ

いましよ。お茶よりハまだ御凝なる物が幾らもありますならう。宗「お茶も濃茶を數ふくゐがると浮されますから。御油斷が成ません。て伴「老人までが愚弄ていハ如何もおらんぜ雑「夫じやア本をうよお宅よばらりと堅固して入つーやるのですう。文「お宅にばらりといへば。富多屋の若旦那ぐらゐお堅い方ハ有ませんねェ瀧「とう〳〵此方へお鉢が廻つて來ふぞ桑原〳〵琴「ちよいとサ御容子の好こと。文「オヤヤ伴「サア〳〵何う賑らよ彈ふ〳〵。と是よりお定りの坐附も濟て皆思ひ〳〵に心意氣なるどを唄へば伴「サア已が例の通りカツポレを遣て見せやう。併し老人の前へハ甚だ恥入げまど宗「イヤ其御遠慮のない所が有難いのでどざります琴「久し振で早く拜見ふさいねェ。と是より手拭を冠り浪〳〵ふがら變よ氣取て踊る景況ハ。胸の惡くやうなのを藝者達ハ可咲さを堪へ石「イヨ〳〵雑「實み音羽屋丸出しだねェ伴「是で例の祝儀も濟だから。更ぬうちよ歸宅致さう瀧「只今御飯を差上ますから最暫時〳〵伴「イヤ飯ハ最ふ御斷りだ文「此お肴ハ御味折へ瀧「イヤ〳〵

俳内

鶴次郎
義太夫
賀魚の行
雪見紅葉
月の未兒
音曲の部
俳諧

夫ハ御箸の付さのだから別に大きふ折の御土産が誂へてあるのを御供の衆に渡してお呉よ

伴「イヤ重ね〳〵宅へまで恐入さふア

宗「今日ハ何もお構ひ申上ませんで却て御迷惑さま

琴「如何そお近いうちに又石「せびねエ文「アレお浮雲ふどざりますよ

伴「イヤ存外に酩酊いさしたハエ

藝者四人「サヨナラ〳〵

下女「とんばん今晩ハ有がさう

皆々「サヨナラ〳〵と送り出されて驚坂ハ大喜びにて屋敷に帰り其翌日師直の前に出

伴「兼て申上置まさ、笹帝の茶入を則ち持参致しまして

師「待兼てゐさ其茶入。ドレ〳〵是へと覽をそづー。

熟と見て

師「成ほど是ハ無類の名器だ。百圓ぶら高くハふいナ

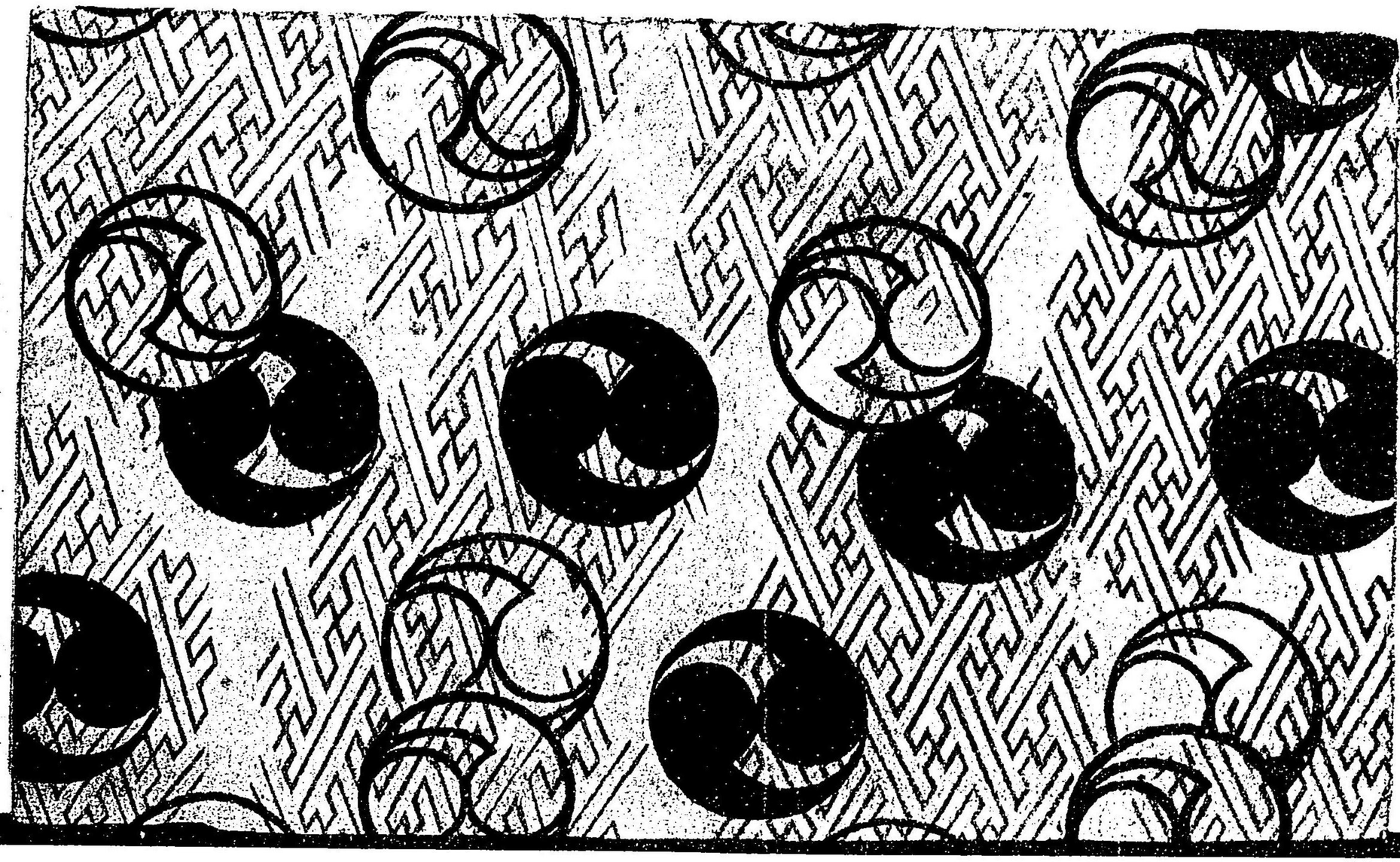
伴「貫價百圓ハ慥でどざりはする上に。持主の宗伴が以後お出入ま相成ますれば。右のお禮と冥加の爲に半金ハ獻納と心得て五十圓に働きますと申ましさが。實に驚く程廉ぶ物でハどざりませぬ。未だ其上ま宗伴を御出入に仰付られゝば。御都合のよい事がどざりま

師「フム屋敷まとつて都合のよいとハ

伴「其都合とハ箇様なもけりてどざります。と耳に口よせ

咽やけば師「そんなら當家の犬と成て。大星初め浪人どもの所行を探索致して呉るゝ」伴「左すれば至極の御便利と存じます。と勧める家來も眼前の利慾に心を惑はされ。遂に笹啼の茶入を買上るを縁として。間もなく宗伴ハ門の出入を許され。折〳〵ハ奥へも出られる身と成しゝば。素より武家の上りまて學問もなり。和歌をも嗜み。殊ゑ商買上手で世事ゑ賢く。骨董の鑒定も委しゝれば。忽地ゑ師直の氣ゑ入て遂ゑハ茶の湯の催し毎に勝手を働く程に成しゝ。皆瀧次郎が盡力ありとて宗伴夫婦ハ只願に其厚志を歡喜ゐ

ゐり



特40
579

東京圖書館

和書門	小說類	別19 函	三架	五九號	三冊

205233-001-2

特40-579

続いろは文庫（正史実伝）

高畠　藍泉／著

M16

EDV-0283